

報恩講の十一月となりけり

鬼右子きゆうし

これは岩瀬〔晝燈〕君の句であります。私はこの報恩講の十一月号から、聖人を偲びながら、「歎異抄」第二節を学んでゆきたいと思うのであります。

この「歎異抄」は、お弟子の唯円房ゆいえんぼうが聖人の滅後、そのみ教えの耳の底にとどまるところを記されたものであります。それは単に聖人の仰せを記憶にまかせて書き記した、というだけのものではありません。既に「歎異抄」と名づけられておるように、聖人の教えが誤った形で世に伝えられてゆくことを歎き悲しむ心からこの書は書かれたのであります。だから唯円房には、これこそが正しい教えであるという確信の許に

聖人の正意を伝えようとして書かれたのでありますから、これらの各節はただ漫然と並べられているのではなくて、何かそこに著者の意図があるのではないかと思ひます。この書が全体として、どんな構成をもっておるか、というについては、今しばらく措おいて、この第二節が記されたことについての意味を考えておく必要があるかと思ひます。

「歎異抄」の第一節は「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつころの発おこる時、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。」と書き出しております。これは聖人の教えの全体を端的に打ち出されたのであります。これだけの短いお言葉の中に聖人の教え即ち「教行信証」の全体がこもっておるのであります。「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり。」というは「教」であります。「念仏もうさん」とは「行」であります。「と信じて」「おもいたつころの発る時」とは